

# 主体性を育む

東洋大学経営学部 非常勤講師

公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

今、教育界では、改革が進められている。社会が急激に変化する中で、予測不能な未来社会を生き抜けるように教育を改める必要がある。

緩やかな変化の時代には、社会のトレンドも大きくは変わらず、過去の成功事例を真似していれば、致命的な失敗をすることもなく、一生を過ごすことができた。しかし、破壊的な技術革新が短期間に生じるようになり、変化のスピードも増している。しかも、衛生の向上、食糧の効率的な生産、医療技術の進展、社会保障制度の確立などにより、健康で長生きできるようになった。変化の中を長く生き抜くためにはどうすればよいのか。

自然界に学べば、環境変化への対処として、多様化が図られる。遺伝的に均質な生物は、環境が変わると絶滅してしまうので、環境に変化が起こると、交配をして、遺伝的に多様な子孫を残すことが知られている。偶然の中で、新たな環境に適合した者が生き残るという持続的なシステムを生物界は備えており、このシステムを備えていたから地球環境が激変しても、約40億年、生命を生き継ぐことができたわけだ。多様な人材がいることで、危機を乗り越える技術や奇想天外なアイデアが出現する可能性が高まり、変化に対応できるはずである。

では、日本の教育は、多様な人材を生み出すことができるのだろうか。

全国の小学校、中学校、高等学校普通科の時間割を比べてみれば、ほとんど差がない。個性尊重と言いつつも、画一的な教育が行われている。これは、日本全国津々浦々、均質な教育内容が保証されており、効率的に教育を浸透させることができる、世界に秀でた制度である。義務教育である小学校、中学校は、基礎的な知識及び技能を習得させるので、地域や学校ごとに差異が生じることが好ましくないかもしれない。しかし、高等学校はもっと多様でなくてはならない。高校生は、自我が目覚め、興味関心も分化し、個性が伸長する。高校生の多様な能力・適性を伸長するためには、画一化された教育では十分対応できない。また、時代の変化を考えれば、たくさんの選択科目を用意し、子供たちが学びたい科目を自由に学べるようにすることが大切である。

では、なぜ高等学校は画一化された教育になってしまうのか。その一番の要因が大学入試である。入試科目を見れば、一部の教科科目に絞られているため、その得点で合否が決まるとなれば、受験科目で一点でも高い点数がとれるよう、受験科目中心の画一化された時間割になってしまふ。受験に関係のない科目などやらなくてもよいというのであれば、できる限りやらなくて済ませようという論理がまかり通ることになる。また、中学生も、中学生の

保護者も、大学進学を意識した教科科目を設置した高校を選びがちになってしまふ。社会が求めている人材は多様であるにもかかわらずだ。

そこで、今、「大学改革」、「高校改革」、「大学と高校との接続改革」の三位一体の改革が進められている。現高校2年生が受験する令和3（平成33）年度大学入学者選抜から、大学入試が大きく変わることとなる。

その変革のポイントは、すべての入試で受験生の主体性を評価するということだ。得点だけで合否を決めるのではなく、「こうしたい」、「こうなりたい」、「こうありたい」という願いや期待をもった「主体」を評価することになる。中学生や高校生の時から、将来のビジョンをもって、自分の学びをデザインし、体験活動や学校外の学びに積極的に取り組み、そのビジョンに沿った進学先を選択している受験生を受け入れようというわけだ。暗記型の知識で高得点が取れた大学入試センター試験を大学入学共通テストに改め、知識や技能を活用する力を測る入試に改めようとしている。これまでの制度が一変するので、「改革」なわけだ。

令和2年4月から、子どもたちの主体を確立するのに効果が期待される「キャリア教育の学びを記述、振り返るポートフォリオ教材『キャリアパスポート』」が、すべての小中高に導入される予定になっている。